

2

Part

高校生の「学ぶ」は
どう変わる？

新しい学び「探究」を通して 自分のあり方を知る

今、高校の教育が大きく変わってきています。新しい学びを象徴するのが、「探究」と呼ばれる学び方です。探究とは何か、授業はどのように行われるのか、大学入試とも関係があるのか、保護者が気になるポイントについて解説します。

**正解のない課題に向き合い、
答えを模索するのが「探究」**

これまでの高校教育では、知識やスキルを身につけることが重視されてきましたが、今、その方向性が大きく変わりつつあります。

新しい教育では、知識やスキルの習得に加え、自分で考えて判断する、考えたことや思いを表現するといった、「身につけた知識やスキルを活用する力」社会で広く役立つ力や「学ぶ姿勢や意欲」を育むことにも重きが置かれています(図1)。また、学び方も保護者の時代から変化し、「主体的・対話的で深い学び」と呼ばれる学び方を目指しています(図2)。

各教科・科目のカリキュラムや授業はこうした視点から再構成され、先生の解説を聞く、知識を

覚えて問題を解く…だけではない、より能動的でアクティブなものになっています。

なかでも端的に新しい学びを私たちにしたのが、「総合的な探究の時間」です。2022年度から始まった新課程で必修科目となっております。「探究」とは、自ら課題を設定し、その課題について情報を集め、整理・分析し、課題の解決に努め、意見や考えをまとめ、表現する…というプロジェクト型の学びのこと。このサイクルをくり返し、教科を横断して学びを深め、具体的なアクションへとつなげていきます(図3)。

探究が必修になった背景には、時代の変化があります。変化が激しく、さまざまな情報や多様な価値観が渦巻く今の時代は、何

図1 育成すべき資質・能力の3つの柱

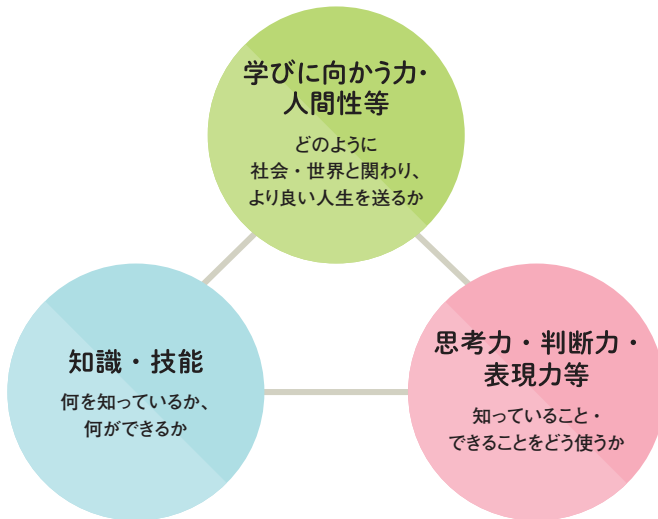


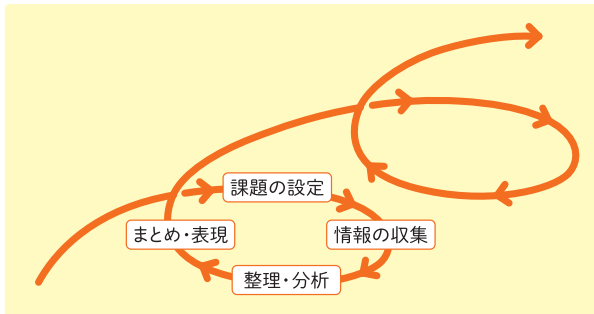
図2 主体的・対話的で深い学び

主体的な学び	<ul style="list-style-type: none"> ● 学ぶことに興味や関心をもつ ● 自己のキャリア形成の方向性と関連づける ● 見通しをもって粘り強く取り組む ● 自己の学習活動を振り返って次につなげる
対話的な学び	<ul style="list-style-type: none"> ● 生徒同士が協働する ● 教職員や地域の人と対話する ● 先哲の考え方を手掛かりに考える
深い学び	<ul style="list-style-type: none"> ● 各教科などの特質に応じた「見方・考え方」を働かせる ● 知識を相互に関連づけてより深く理解する ● 情報を精査して考えを形成する ● 問題を見いだして解決策を考える ● 思いや考えを基に想像する

※本記事は「高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説【総合的な探究の時間編】」を参考に編集部でまとめました



図3 探究のサイクル



が正しいのかを自分で判断して行動すること、新しい視点でものごとを見て変革を起こすことが求められます。自ら課題を見いだしアクションを起こすという探究は、いわば生きていくうえで必要なライフスキルを身につけるための科目とも言えるでしょう。

体験的に学ぶ探究が、変化のきっかけになる

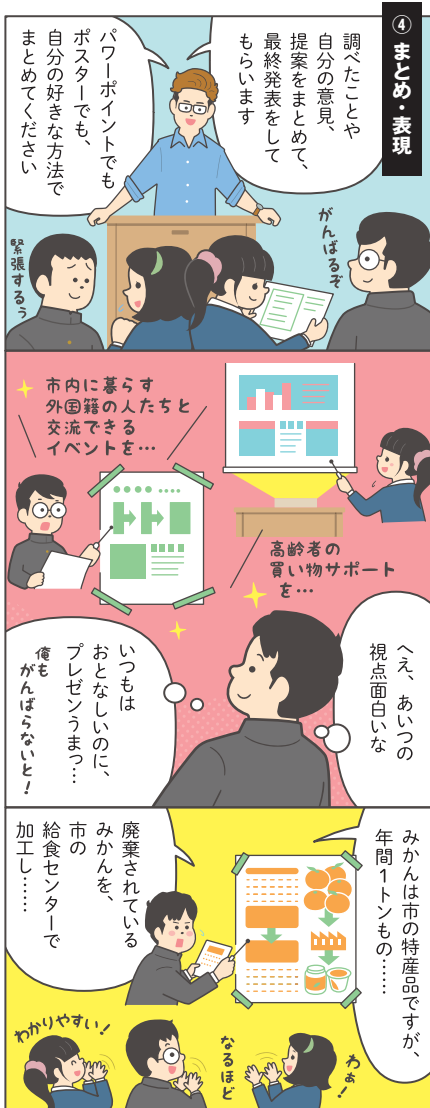
下のマンガにあるように、自分の課題を設定するところから探究のサイクルは始まります。課題についての情報収集では、インターネットや書籍といった資料からの情報だけでなく、実際に困つて

いる人やその課題に詳しい人に話を聞きに行くなど、フィールドワークも行います。集めた情報を整理・分析したり人と意見を交わし合ったりしながら解決策を考え、場合によってはアクションにつなげ、最後は資料にまとめてプレゼンテーションやポスターセッションを行います。なお、探究の進め方やテーマは学校や地域によつてさまざまです、グループでプロジェクトに取り組むこともあり。ここで紹介しているのは多様なケースの一つであることご理解ください。

探究に取り組むうえでポイントになるのが、実感を伴う課題感をもつて臨むことです。日常生活や社会に目を向けたときに湧き上がってくる疑問や興味・関心に基づき、「(この課題を)なんとかしたい」という強い動機をもつて取り組める生徒は、ほとんど自走していきます。

一方、私たちは取材を重ねるなかで、探究をきっかけに変化した生徒の姿を何度も見聞きしてきました。それまであまり勉強に意欲的ではなかった生徒やいわゆる勉強が苦手な生徒が、探究を通して学ぶ楽しさや行動する面白さに気づき、変わっていく。先生方からも、「これまで見えなかった生徒の側面を、探究を通し





て知ることができた」「こちらが驚くほど成長する生徒がいる」という声をよく聞きます。こうした声からは、能動的、体験的に学ぶ探究が、生徒にとって変化のきっかけになることがよくわかります。

探究での経験や気づきが進路選択につながる

保護者として気になるのが、進路選択、特に大学受験との兼ね合いです。そもそも探究は、自分の興味・関心を掘り下げる学びです。そして同時に、自分自身を掘り下げる学びでもありません。自分は何が好きか、何が得意か、どうありたいかを探ることに、本質があります。つまり、高校卒業後に何をしてどう生きていくのかという問いと、密接に結びついたものなのです。実際、探究をきっかけに、将来やりたいことや学びたいことの方向性が見えてくるという生徒は少なくありません。これから社会に出て人生の選択をしていくうえで、探究によつて自分のあり方を知ることがとても重要なのです。

もちろん大学受験においても、どの大学で何を学ぶかを選ぶ際の動機になります。さらに近年は、総合型選抜や学校推薦型

選抜という方式で大学を受験する高校生が増えています。これらの選抜方式では、いわゆる学力試験に加えて、高校での取組や大学での学びへの意欲が重視されます。つまり、探究を通して得た経験や学びが、大学受験時の評価に直接的に関わってくるのです。実際、高校で取り組んだ探究の成果を評価する入試を行う大学や、入試自体が探究型の大学も徐々に増えています（詳しくは本誌34ページの記事をご参照ください）。探究に熱心に取り組むことで、進路選択の幅を広げることができるのです。

自分の興味・関心を掘り下げると同時に、自分自身を掘り下げるのが探究という学びです。総合的な探究の時間でどのような課題に取り組んだのか、何をされたのかということに加え、何を考え、何を感じ、どんな気づきがあったのか、ぜひお子さんに尋ねてみていただきたいと思います。子どもが何に興味・関心をもっているか、自分のことをどう分析しているかがわかると、将来の進路についても対話がしやすくなります。保護者が導くのではなく、子どもが自分のあり方について考え、探究していくのを見守ってあげてください。



探究によって子どもはどう変わる？

教科書があり、問題には正しい答えがあり、正確かつスピーディーに答えられると評価される、というのがこれまでの学校教育でした。一方、現代はVUCA*の時代と言われており、当たるとも知れない未来予測に基づき、大人が「これが必要な知識だ」と子どもたちに習得させようとするのは的外れになりつつあります。そうではなく、子どもたち自らが、自分で得た情報に基づいて考え、判断・行動する力が必要になっているのです。そこには、自分はどんなことが好きで得意なのかという判断も含まれるでしょう。未知の状況や答えがわからない課題に出会ったときに、どう向き合いどう振る舞うかを学ぶのが探究であり、これからの時代を生きていくうえで必要なものだからこそ、必修になったのだと私は理解しています。

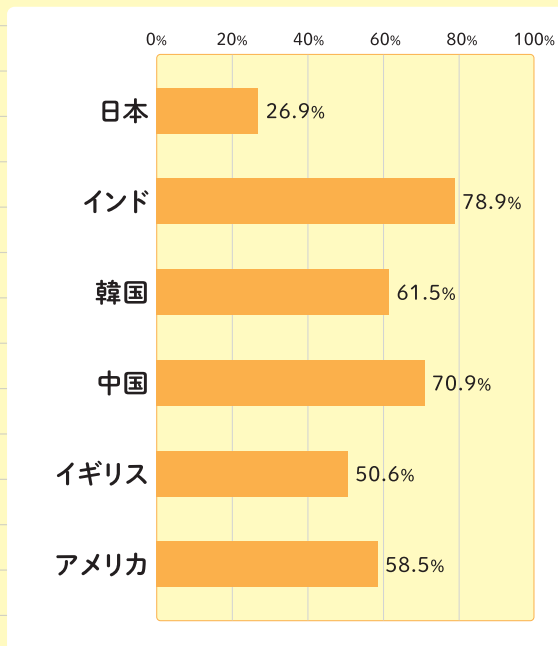
探究学習やプロジェクト型学習の設計を学校の先生と共に考える機会が多いのですが、「最初はやらされ感があった生徒が、地域の大人から話を聞いたり、解決策を考えてアクションを起こしたりするなかで、徐々に主体的に動き出すことに驚いている」という先生の声をよく耳にします。社会とつながり、誰か・何かの役に立ってい

るといふ実感が得られることで、気持ちに火がつくのでしょう。文字通り、目の色が変わってくるそうです。探究は、自分は何かできるかもしれないという自らを尊重する気持ちを高めると同時に、社会に対する信頼、大人に対する信頼を回復する機会にもなると感じています。

また、勉強やスポーツができる・できないではなく、人間性をより多面的に見ることができるようになるのも、高校で探究に取り組む意義の一つだと思います。チームでプロジェクトを進める場合には、さまざまな能力が必要とされます。個性を持ったメンバーがチームとなり問題を解いていくなかで、多様な資質・能力を発揮できるシーンがあります。本を読むのが好き、人とコネクションをつくるのが得意、資料をまとめるのがうまいなど、自分の得意なことやできることを活かしてチームに貢献することで、自信や人を信頼する気持ちが芽生えます。また、友達の新たな一面を知ること、多様な資質・能力を認め合う素地ができます。

日本の若い世代は、自分が社会を変えられるという意識が諸外国に比べてとても低いというデータが出ています(図)。確かに、今の子どもたちを見ていると、世の中への諦めがあるように思います。親や学校、社会からのプレッシャーに、「周囲が求める自分にならないといけない」と感じているのかもしれませんが、そうしたなか、「総合的な探究の時間」が、子どもたちが「自分は自分であっていいんだ」と思える時間になるといいなと思います。自分も知らなかった自身の側面や価値があることに気づいたり、可能性を感じられたりすることで、自分のことを認められて、他者のことも認められる。自分のことを好きになる。自分の行動が社会を変えることにつながると思える。そんな時間になっていくことを期待しています。

図 「自分の行動で、国や社会を変えられると思う」と感じている人の割合(国別)



日本財団「18歳意識調査(国や社会に対する意識)」(2022年)より



一般社団法人 こたえない学校
藤原さとさん

日本政策金融公庫、ソニー(株)などに勤務。長女出産後、ヘルスケアコンサルタントとして医療機関再生、地域包括ケアシステムの構築サポート、ミャンマーでの乳がん検診事業立ち上げなどに携わる。2014年に「こたえない学校」を設立。2018年、経済産業省「未来の教室」事業で、世界屈指のプロジェクト型学習を行う米・ハイ・テック・ハイの教育プログラムを日本に導入。著書に「『探究』する学びをつくる 社会とつながるプロジェクト型学習」(平凡社)ほか。

*Volatility(変動性)、Uncertainty(不確実性)、Complexity(複雑性)、Ambiguity(曖昧性)の頭文字を並べた言葉で、変化が激しく先行きが見えず、複雑さと曖昧さを含む社会情勢を意味する。